

書評

日本國民經濟構造の研究

——大阪商科大學助教豊崎稔著「日本機械工業の基礎構造」を讀む——

山中篤太郎

日本經濟學の要求が一時「流行的」に叫ばれてその後稍々鎮靜化したかに見ゆる今、この著者によるこの著書を得たことはかゝる要求への答が正しき方向に而も靜かに押し進められつゝあることを示す意味に於いて極めて意義深きものを感じる。今夏卒讀した讀後感を茲に記さんとするに當つて先づ記したく感じたのは左の一點である。

本書は、題して「日本機械工業の基礎構造」と云ふ。併し、讀者は「機械工業」の文字に錯覺してはならない。機械工業は

日本國民經濟生産力構造の一分野に止まる。併し、茲に扱はれる對象は、而して、この對象を問題として見る立脚點は、限られたる機械工業の部分的研究ではない。機械工業を通じて見たる日本國民經濟構造の分析なのである。

著者の言葉を以てすれば、「發展機構の分析」である。從來専らそれが經濟學のすべてであると解された抽象的理論的考察に對し、これを一應の指針としつゝ、一定の批判的態度を以てする具體的事實の解剖を行ひ、この兩者の上に立脚しつゝ、日本國民經濟の發展機構を、政策を目標としつゝ分析を進めて行くこと、これである(序文)。

従つて、茲に企てられることは、日本の現實の國民經濟に即しつゝ、理論と現實の不一致を何れにも偏せずして發展の機構をとらへ、而も、それは單なる抽象的敘述的分析ではなく、政策の構成を目標として進めること、これである。理論と現實、客觀と政策、その渾然たる統合が企てられるのである。機械工業をとらへる所以は著者がその序文に於いて簡言する如き理由あるにせよ(序文二頁以下)、機械工業を機械工業としてその内

部で分析することは主たる目的ではないのである。この小文の表題とせる如く、日本國民經濟構造の研究、それ自身に外ならないのである。

そこに論ぜられるのは、日本國民經濟ではあるが、一方日本國民經濟政策の爲に貢獻すると共に、現段階の世界の經濟學的研究に課せられた綜合の課題へも答へることが試みられる。勿論、かゝる試みが剩すところなく行はれ得たりとはするものではないが、少くともかゝる試みが茲に試みられてゐることは、すべての讀者の感得するところでなければならぬ。筆者は著者の勞を多とすると共に日本經濟學の爲に本書を得たことを喜ぶものである。

二

茲に本書の全貌を紹介することは勿論紙幅の許すところではない。だが、特徴の若干を紹介したいと考へる。

本書の特質の第一はその實證性の豊富なることである。特に我が國機械工業の分析に當つては、單に統計的なデータが廣汎に攪渉されてゐるに止まらない。そこには、技術的智識の豊富なる利用があり、經濟學者としての著者の拂はれた多くの苦心をそこに推察することが出来る。特に第三篇「我國機械工業の

技術的發達」の部門に於いては、原動機器、作業機器、工作機器の三大部門に分ち、その生産技術が、如何に輸入せられ、如何なる程度で日本の技術の内生、推進を可能ならしめつゝあるか、或は可能ならしめてゐないか、が分析される。例へば、蒸汽機關、タービン、蒸汽發生器、水車、發電機、電動機、變壓器、内燃機關、紡績機、織機、探鑛機械、切羽運搬機、抄紙機、製糖用分密機及び真空蒸發罐、アンモニア合成機、石炭液化用高壓裝置、自轉車、自動車、航空機、通信器から、各種工作機械、即ち、各種金屬工業用工作機械、工具、等に及んで居り、その各々について、多くの技術に關する知識が示されるのである。そして、種々の生産部門の作業機生産は、例へば、紡績作業機、化學用超高压高温裝置、乃至農業用耕耘、除草及び刈取用機械等の如き、技術的水準が極めて低いか、又は試験時代に入つた許りであるか、或は、技術が全然ないのも同様であることが論證される。かくて、詳細な技術分析を通じて、今後必要な機械は勿論、今迄必要とした機械でも、若干の原動機械を別にすると、技術的には先進國の技術の模倣からずんば部分的改良を出でぬ域にあり、後進國の機械器具工業の構造的特徴を示すとされる。これらの大略の結論は必ずしも、我々の豫知せざる點でもなかつたけれども、その結論が技術的基礎に於いて

精確に茲に指摘されるのである。

三

第二には、この實證性を貫く論理である。著者によれば、我が機械器具工業の原料基礎たる金屬工業は質量兩面より先づ自立性が不足し、勞賃の低廉による生産の機械化の阻害従つて機械工業に對する國內市場の狹隘が依然持續する。併し、他面、機器工業の展開を齎す如き生産技術上の發展、金融資本のこの方面への投資は不足し、間屋依存の下請中小性が看取され、所謂自然發生性の條件は不足する。これを技術的に見れば、技術的には後進的ではあるが原動機の一應の發展を見る外は、その他の機器の生産の技術的缺陷は著しく、構成上、工作機械、就中、金屬工機、工具技術の後進性、顛倒的發展が重要な問題として指摘されねばならない。結局、世界經濟に於いて完全な機械設備をもち、且それを自給し得る先進國民經濟によつて不平等價交換を強制され、これに對し、我が國民經濟は國民勞働力の濫費を要求される結果となり、かゝる地盤としての勞働力も漸く疾病災害の侵蝕するところであり、茲に我が國民經濟の不健全化が憂へられるのである。他面市場的地盤を見れば、外國市場は殆ど支配せず、結局國內市場のみを市場的基礎として成

立し、そこに我が機械工業の後進性が示されるのみならず、我が國民經濟の非生産過程を著しく不安定ならしめるのである。蓋し、軍需産業と再生産産業とは經濟的性質を全然異にするからである。

四

以上は卒讀の間に得た感想の一二を記したのみであつて、本書の全體系を均整的に紹介する目的に出でず、従つて又、かゝる均整的紹介をなし得たとも信じない。併し、尙、以上によつて本書の持つ價値は既に窺ひ得ると信ずる。

又、讀過の間、二三の特殊なる點に關して更に著者の説明を乞ひたく感じた點もない譯ではない（例へば、金融資本制の生成乃至成熟に關する金融資本制の意義等）。

更に又、これは、既に著者自身が斷つてゐることであるが、以上の分析が政策との關聯に於いて見られつゝあるにも係らず特に、以上の分析の結論の導成する政策構成が本書の重要な部分を占めざりしこと、も想起する。併し、この事についての著者の見解は全く述べられないのではなくて、序文の中に簡潔に展開されて居る。或は又、例へば、現段階に於ける政策展開の諸要因の中で、我が資本の持つ主觀の重要、或は、より正確に

は主觀缺點の重要を、その商業資本性によつて指摘されて居る（四四四頁）。けれども、繰返す如く、政策の演繹が著者の満足する分量に於いて行はれなかつたことは、本書の缺陷と云ふよりは、本書の第二篇を豫約するものとして、本書にふれなかつたところと云ひ得るであらう。

機械工業に關する研究は、現在の狀態に於いては、最近の事情を對象とする分析が事實上不可能になつてゐるのに對し、本書に論ぜられた事實以後に於いて、我が國經濟政策の展開によつてこの部門の生産力が著しく推し進められつゝあることは云ふ迄もないことである。併し、例へば技術的基礎の如きは、單なる資本設備の増大と同時に、短期間に簡單に展開され、自生的發展を辿り得るとは考へ得ないから、著者の指摘する多くの點は尙維持されるであらうけれども、機械工業生産それ自身の發展、殊に、經濟政策の作用によるかゝる發展を著しき事實とする意味に於いて、かゝる新たな客觀的現象迄も對象に加へて、その政策との聯關をとらへる學問的努力が試みらるべき必要は特に指摘する迄もないと考へる。筆者は著者の其爲の努力がかかる方向に進められるであらうことを期待せざるを得ない。

筆者は、豫ねて、科學的なる國民經濟政策の研究は、國民經濟構造の研究を地盤とすることを思ひ、又若干かゝる立場より

する研究を試み來つた。と同時に、かゝる政策構成の過程に於いて、従来の唯物的見解に對し、「意識化」の過程、主觀化の過程を問題とすべきことも主張し來つた。茲にこれに關して議論する暇はないけれども、かゝる意味に於ける「政策」の研究は未だ多くの満ざるべき研究分野をのこしてゐる。かゝる立場より顧る場合、本書が我が學界に與へた功績は大きいと共に、その約束して果すべく殘されてゐる研究分野に對して持つ責任も亦著しく大きいと云はねばならない。その責任の果さるべきを期して待ちつゝあるのは、獨り特に筆者のみではないであらう。（昭和十六年十月廿五日）